

学校教育課だより

# かけはし



学校教育課だより  
「かけはし」  
【第4号】  
令和2年  
7月21日発行  
御殿場市教育委員会  
学校教育課

## 予測不能な世の中における

### 「ニューノーマル」について

教育監兼学校教育課長兼教育指導センター所長

勝俣 純

七月一日から、入場制限付きで東京ディズニーランドが開園しました。この日は、人気のアトラクションであつても五分待ち程度のものでした。テレビの画面には、ソーシャルディスタンスをとりながら、ゆとりをもってアトラクションに向かう人が映っています。あなたは、すいているTDLと満員のTDL…どちらがいいですか。

いま、「ニューノーマル（新常态）」とか「新しい生活様式」という言葉をよく耳にします。

さて、このニューノーマルという言葉から、これまでの私たちの生活を振り返ると、今までの生活をオールドノーマルと単純に言えるのか、それとも今までの生活は、ある部分はノーマルとは言い難い、アブノーマルではなかったのか…と戸惑いを感じます。

平成に入り、日本の総人口は減少し始め、それと並行して科学技術は進み続け、日本の社会は大きな転換期に入りました。ソサエティ5.0の時代に入ったと言われている

たものの、このコロナ禍によって大きく背中を押されなければ、時代の変革意識やこれまでの常識を見直すといった行為は、これほどまでに進まなかったものと感じています。学習指導要領の冒頭には、「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される」という一文があります。『厳しい挑戦の時代』とは、「未来予測の困難な時代」と言い換えることができるでしょう。今の子供たちどころか、私たちが、まさにコロナ禍によって、今後の見通しがつかない不安な時代を生きている当事者となつてしまいました。

こうした現状では、古い学習指導要領で学んだ私たちがあつても、この予測不能な世

の中を的確な情報収集と判断で乗り越えていかななくてはなりません。

さて、「構造災」という言葉を知っていますか。大きな事故や事件を振り返ると、「天災」でも「人災」でもない「構造災」と呼ばれるものがあります。いくつかの特性が状況に応じて複合的に関与する、科学技術と社会の境界で発生する災害といわれています。その特性の一例として、「先例が間違っているときに先例を踏襲して問題を温存してしまう。」とか「複雑性と相互依存性が問題を増幅する。」といった、明らかに当事者が主体的な判断を放棄することが災害の原因となつたことが示唆されています。

遠い昔、昭和二十二年に制定された教育基本法でも教育の目的は、「人格の完成」と示されている通り、今も昔も、これからも「主体的に生きる」とのできる人づくりを具現化するのが教育活動といえます。これからの時代を生き抜くためには、改めて、独りよがりにならない「主体性」を強く意識すべきであると感じています。

2年次研修 幼稚園参観  
子供の気持ちに寄り添って  
幼稚園の指導に学ぶ

七月三日（金）に、御殿場幼稚園・森之腰幼稚園・玉穂幼稚園の三園で、小中学校で勤務する二年目を迎えた教員の、二年次研修「幼稚園参観」を実施しました。

研修生たちは、最初は戸惑いながらも、終始笑顔で園児に接しながら、幼稚園の先生方の細やかな指導に、多くのことを学ばせていただきました。研修生の感想の一部を紹介いたします。

どんな時も子供たちの目線に立って関わる姿が印象的でした。  
言葉で伝えることがまだ十分にできない子供たちの思いを知るために、状況をよく見たり、子供の表情や表れから感じ取ったりする大切さを学ばせていただきました。  
自分も子供の気持ちに寄り添える教師でありたいと改めて思いました。



研修では、一人一人の気持ちに寄り添ったり、様々な思いや達成感を感じさせたりすることの大切さについて学ばせていただきました。

私も先生方のように、一人一人を理解し、生徒と共に成長できる教員になりたいと思いました。



### 教育センターだより 風薫る

## 「子供と教師の具体的ななまのうすかみ」

御殿場市教育指導センター室長 高橋 正彦

日頃から多くの先生方の授業を参観させていただいてます。できるだけ、事前に学習指導要領とのつながり、学ぶべき学習内容の確認をして出

全員で、交代でと、読む形を変えながらテンポ良く暗唱したり音読したりしていきま

かけます。実際の参観では、授業での「具体的で特徴的な子供と教師の姿」を選び出し、それをつなげて、子供の学びの姿を読み解こうと思っていま

暗唱や音読の際には、教師の「はい」という合いの手が入り、子供たちは調子よく声を出しています。子供たちが前向きに学習にのめり込んでいくのがわかります。子供たちが心地よく音読をしています。その勢いのまま、詩づくりに入っていきます。授業の中

あります。私自身の学びでもあります。それを授業者の先生方と共有していきたいと思っ

ています。A子さんは質より量で次々つくっています。合間には他の子の様子を見て回ります。B男さんはじっくりと取り組んでいます。ちいさい「ゆ」。ヒントカードには満足せず、「ちゅう」を思いつきます。教師は「書けば」と促しますが、抵抗があったらしく、しばらく

く考えた末、「ちゅうくらい」に思い至ります。次の「みゆ」には苦悶を感じます。C子さんもヒントの「チョコレート」には納得せず、教師と話しているうちに「ちよきちよき」を考えつきます。D子さんは支援員さんの支援を受けながらも、自分ができるところは自分でやります。

授業の最後の場面。A子さんは「またやりたい」と声を上げています。すっかり課題にはまっています。すつかり課題に、終わりの挨拶の直前まで問題を考え続けています。そして、思いついたのが「みゆーと」。

その場にいた大人も感心。C子さんは満足気に笑みを浮かべています。D子さんについては、「自分の力でどんどん書いていて、楽しそうに取り組んでいました」と支援員さんがコメントしていたと聞きま

した。このような子供たちの表れを生み出した教師の指導と工夫を考えてみます。

①授業構成。「おがわのはる」の音読→「ちいさいやゆよ」の音読→自作の詩づくりという授業の構成と難度が、子供たちの意欲と思考の流れに合

②ヒントカード。「みゃ」などを使った言葉が絵で例示されています。絵を見れば、子供は言葉を書くことができます。しかし、課題がありその答えの例があることで、子供は自分で思いわば「例2」を考えたいと思いが始まります。子供は例に学びつつ、例でないものを考え始めます。子供の考える意欲が、見事に引き出されています。

③教師の姿勢。子供たちへの直接的な注意はほとんどありません。「いいとこ見せなくっちゃ」「かっこいい」「今まで一番よかった」などの言葉かけで子供をその気にさせていきます。これまでの指導の積み重ねが感じられます。もちろんだめなことはいけません。後日「並び順を変えて欲しい」というわがままを何度も言う子に、「変えません」で押し通したという話も聞きました。

授業の方法論はたくさんあります。私には、残念ながらもそれが正論ということではできません。今、目の前にいる子供たちがこの一時間の学びを充実させてくれること、それを積み重ねていくことが大切ではないかと思っています。